

5 ダメなことを言えば言うほどダメになる〉 子どもは評価されたように育つ！

- 子どもは叱られてばかりいると、「私はダメなんだ」と、自己肯定感が低くなる。自己肯定感が低くなると、活動への意欲がなくなり、注意を引くために問題を起こす。「周りの大人が私のことを不足に思っている」と感じる子どもは、子ども自身も大人のことを不足に思っている。「今のままで満足だよ」というメッセージを送り続ける。
- 「まだ、準備ができないの？早くしなさい」と否定的な言葉掛けは、子どものやる気の芽を摘んでしまう。子どもの行動を肯定しつつ、早くできるように、「もう、準備はできたかな」に変える。あなたが「まだ、準備できないの？」と言われたらムツとするはず。よい言葉を笑顔で言い続ける。



6 みんないいところがある〉 加点主義&ゼロからのスタート！

- 子どものできていないことより、できていることに注目する。できているところに目を向けていくと、子どものモチベーションが上がる。テストで40点取ったとすると、なぜ40点しか取れなかったのか失敗を追求するのではなく、なぜ40点取れたのか成功を追求する。そして、40点取れたことを続けていく。100点からスタートしてできなところを減点していくのではなく、ゼロからスタートしてできているところを加点していく。
- 私たちはある一部分だけで「～な子ども」と決め付けてしまう。子どもを多面的に評価し、「あなたはこんなことができるよ、あなたのこんなところが好き」とよい面をたくさん伝え、子どもが多様な価値に気付けるようにする。



7 自分を好きになれる子どもを育てる〉 自分っていいじゃん！

- 子どもは人から好きになってもらって、はじめて自分のことを好きになれる。自分のことを好きになってくれる人が多ければ多いほど、自分のことを好きになる。テストの点数や作品の出来映えという結果や能力をほめるのではなく、努力している過程や小さな成長に注目する。そして、子どもが何かをしたではなく、そこに存在していること自体を喜び、感謝の言葉を掛けていく。
- 人は自分のことを過小評価する傾向にある。本人にとっては短所でも、他の人にはあまり気にならなかったり、逆に長所に見えたりすることもある。自分の長所も短所もひっくるめて、自分を肯定的・多面的に捉え、自分を好きになることが大切である。自尊感情が高いほど対人関係もよくなる。
- 「あなたは自分のことが好きですか？」
「あなたは子どものよいところ・好きなところをすぐ言えますか？」



子どもは凸凹があって当たり前。全て標準、オールマイティは難しい。できないことがあっていいんだという安心感、失敗しても許される安心感があって挑戦できる。→「ミッシングピース=欠けたところがあるから人は向上できる！」

多様性を尊重する、違うことがおもしろい、居心地よいと思える学級経営を目指す。→「みんなちがって、みんないい！」

